

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

# アルカ通信

## ARUKA Newsletter

NO.222  
2022.3.1

\*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

## 加曾利B式土器

— 山内清男生誕120周年に向けて —

鈴木 正博

### ● 第44回 ● 山内清男の加曾利B式制定と課題

縄紋式土器とは何か、本連載ではこの問いの縄紋式土器を加曾利B式土器に置き直しても本質が不変となる構図へと位相転換し、日本考古学の知的蓄積を加曾利B式土器研究方法の発達史として継続的に導出しており、英雄イベント史として学問を分断させる通説学史とは趣が大いに異なる。

今日の加曾利B式研究は命名の由来や命名者である山内清男の『日本先史土器図譜』以降に研究対象を矮小化する立場が殆どであり、それでは命名以前となる明治時代から大正時代にかけて該期の大森貝塚や西ヶ原貝塚、そして椎塚貝塚や宝ヶ峯遺蹟等で展開・蓄積された研究方法が土台を構築せず、特に日本考古学の近代化や後代の加曾利B式研究の進展に果たした該期遺蹟の役割も認識出来ないことになる。そこで坪井正五郎の『日本考古学の父』としての代表的な業績の一つでもある「**コロボックル考古学**」を近代化の真骨頂として学史の俎上に載せ、その神髄となる遺物形態学の総合化と高度化に学びの範を求め、特に**具体的な分類モデルによる類似や順序等の比較過程を導出する遺物形態学の高度化こそは、今日の加曾利B式研究にも十分に通用する知的接近方法**であり、坪井正五郎没後は長谷部言人や鳥居龍蔵に暗黙知の如く受容され、更には**杉山寿栄男も批判的継承の代表**となり、山内清男にもその刺激や影響が認められる。

さて、大正13年に戻るならば、考古層位に基づく貝塚の発掘調査報告が頻出し、それらは昭和時代の先駆けとなる革新的な先史考古学の実践として注目される。『人類学雑誌』第39巻第4・5・6号では前回触れた山内清男の小川貝塚略記報告に続き、小金井良精と人類学教室が人骨蒐集を目的として大正13年3月から4月に実働10日間実施した加曾利貝塚の発掘記事も掲載する(八幡一郎(1923)「千葉県加曾利貝塚の発掘」)。その記事によれば山内清男がE地点、八幡一郎はB地点を発掘し、人骨蒐集とは別に両地点の土器の違い、及びB地点

の層位別による新古導出が注目され、後年には山内清男も「加曾利貝塚の発掘(大正13年3月)は、**土器型式の内容決定、層位的事実、年代的考察**に向って僕等を躍進せしめた。**加曾利E地点貝塚発掘の土器、加曾利B地点貝塚発掘の土器は各別個の一型式とみとめられ、爾後地点の名称は夫々の型式を指示する言葉となった。**」(ゴチック体は引用者、以下同様)と「**加曾利貝塚編年**」の意義と成果の普及を訴求する。更には昭和時代に突入する先史考古学の改革成果も「**関東の土器型式に、(一)繊維を含む土器型式、(二)繊維を含まない諸磯式、(三)「勝坂」又は「阿玉台」、(四)加曾利E、(五)堀之内、(六)加曾利B、(七)「安行」の年代的序列が認められた。尤もこの各階段には二三の型式が細別され得る場合があるが、大体に於て関東に於ける土器型式の全般を網羅して居る。」と「**関東7階段年代的序列**」として総括される((1928)「雑報 下総上本郷貝塚」『人類学雑誌』第43巻第10号)。**

「土器型式の内容決定」と新旧の実態が伴わない松本彦七郎との違いが際立つが、やがて東北大学内部の人事問題と抵触することとなり、同僚による明示的批判は憚られるようである。こうして同情への同調圧力は業績の忖度へと向かい、忖度文言は極めて厳選される。

大正時代末の層位重視に基づく遺蹟編年が今日的な「加曾利貝塚編年」に代表されるならば、昭和時代初めには「**関東7階段年代的序列**」という**地方編年**が構築されるまでになる。同時に「(四)加曾利E」と「(六)加曾利B」も含めて「各階段には二三の型式が細別され得る場合がある」との、更なる層位別やより有効な標本性も含めた新たな課題も明記される。

「(四)加曾利E」は正に上本郷貝塚調査直後の速報で地点別の層位に触れ、特に竪穴住居址の層位と土器の新古を明らかにする快挙を誇示し、翌年には図面を添えた上本郷貝塚調査報告(伊東信雄(1929)「下総上本郷貝塚の竪穴に就いて」『史前学雑誌』第1巻第1号)

で竪穴別層位別を具体化する(柳澤清一(1985)「加曾利E式土器の細別と呼称(前篇)」『古代』第80号)。

しかしながら、「(六)加曾利B」は層位に基づく土器の装飾と形態が未明である。僅かに八幡一郎がB地点の所見を「かくて一区二区と掘り進んで数区に及んだが肝腎な入骨は細片が時々獣骨に交つて出るだけで影も見せない。私達が欲しがつて居る土器も多くは細片が雑然として挟まつて居るに過ぎなかつた。」と明記するように、E地点出土土器片の第48図(会津八一記念博物館(2021)『山内清男の考古学』の図4をトリミング)を参考にすれば、B地点の「細片」度合も自ずと髣髴とする。

従って、大正13年の加曾利B式制定時の現場では層位別新古の喝采で溢れる研究者冥利に尽きるものの、「**土器も多くは細片**」では**山内清男以外には層位別「土器型式の内容決定」の有効性が極めて懸念され、喝采が流布する学問的普及状況には無い**。「土器型式の内容決定」には土器の全貌を知る標本が望ましく、しかも更なる細別の層位別検証も新たな課題と認識される中、八幡一郎の「細片」所見では人類学教室内での認証すら悩ましい。

改めて「**爾後地点の名称は夫々の型式を指示する言葉となった**」との実態を山内清男も執筆する『史前学雑誌』で検証するならば、伊東信雄は前掲書にて「**山内氏の所謂加曾利E式**」と指示する一方、**八幡一郎の同僚でもある甲野勇が加曾利B式とは微塵も指示しない状況**(甲野勇(1929)「茨城県小文間村中妻貝塚調査概報」『史前学雑誌』第1巻第1号)では**普及は望むべくもない**。



▲第48図：山内清男による加曾利貝塚E地点発掘

\*巻頭連載は隔月です。次回は太村裕さんです。

## 目次

■加曾利B式土器 山内清男の加曾利B式制定と課題(第44回) 鈴木正博 …1  
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第37回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイパレット・サイト(第215回) 古林舞香 …3  
■考古学者の書棚 「古道 古代日本人がたどったかもかみちをさぐる」 芹沢一路 …4

## 考古学の履歴書

## ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第37回) 間壁 忠彦・間壁 葎子

## 8. 奈良三彩薬壺形土器の大と小(1)

今回話題とする資料の中心となる奈良三彩壺については、すでに『倉敷考古館研究集報20号』(1988年10月)に間壁忠彦が「奈良三彩蓋付壺」として詳しく報告した資料である。詳細はそれに譲らねばならないが、とにかくこの壺が、館の資料になった経緯だけは示しておこう。

博物館の基本的な仕事の一つには、関係資料の収集がある。その場合にはもちろん購入も重要な手段。しかし倉敷考古館では、常陳資料のほとんどは、発掘調査資料を基本としたものだった。購入費予算など、初めから無いに等しい状況だったのだろう。財団法人とは言え、開館が1950(昭和25)年という二次大戦後から僅か5年、激しいインフレの結果だろう。他の経営状況も、基本的に改善される気配もなく、私達の退職時まで続いていた。

「この資料考古館では、購入されませんか」といって写真を示されたのは、広島県の方で、古くから親交の人であった。同氏は考古学や民俗学に造詣も深い事から、各地に知人も多く、その一人に頼まれたとのこと。1987年の夏ごろだった。

写真はいわゆる薬壺形と言われている、蓋付の美しい三彩壺であり、高さも胴径も、20cmを越すらしい。古く岡山県出土とされているので、出来れば岡山県のしかるべきところで購入してほしい、と言う事だったようだ。もちろん、話をされた方も、所蔵の方も、こうしたものの売買には全く関わりの無い方で、むしろ本体の正しい評価を求められているようにも思えたのである。

倉敷考古館は、開館時は江戸時代の土蔵造り米倉一棟のみだが、7年ばかり後に、鉄筋で米倉風1棟を増築。この時常陳品として、大原美術館で現在は、陶器東洋館で展示する資料の中の、中国関係資料のほとんどを展示していたのである。そこには、漢代の緑釉明器類や唐代の三彩釉人物俑や、馬やラクダなどもあった。私達で、修復したものもかなりあった。これらは、大原美術館の絵画を直接収集に当たった児島寅次郎氏が、エジプトや中国の資料も収集されており、展示されてなかった資料。当時はまだこうした資料が、手じかで見られることも少なく、私達を、こうした資料に対する、門前の小僧くらいには思われたのかもしれない。しかも倉敷考古館では、大飛鳥遺跡の調査やその略報を出していたことなど、話をもたらした方は、十分に承知されての上だったとおもう。

この大飛鳥遺跡については今後も触れることが多いので、多少詳しく述べておこう。1962(昭和37)年に、岡山県笠岡市沖の離島・大飛鳥で、小中合併校舎の狭い海浜の運動場、海岸砂州の山寄りギリギリに鉄棒を設置しかけた。その時、笠岡市教育委員会の方が突然考古館に来られたのである。以前から笠岡市周辺の遺跡の事もあり、大変懇意な方であった。「こんなものが出かけたので…」といわれて、小さい箱の中や、服のポケットなどから取り出されたものを見て、私たちは、ただただ息を呑んだのである。

そこには三彩の小壺やその蓋が数点もあり、皇朝一・二銭も数種。ポケットから出た分厚い六花弁縁鏡は唐鏡で、著名な東大寺大仏殿の鎮壇具鏡と同形と判明。直ちに私たちも加わった、一次と二次調査。1964年に倉敷考古館小報1として14ペー

ジばかりの『大飛鳥遺跡』(鎌木義昌・間壁忠彦)をだす。これに示した主な遺物として、鏡5面中、2面唐鏡、3面は平安期の八稜鏡。三彩釉陶器は全て奈良三彩の薬壺形小壺だが、蓋と身は全て別々出土で、蓋は13、身は断片も含め7個体分。皇朝銭は八種で約80枚。その他鈴や帯金具類やガラス器片、多くの須恵器や土器類まで充分には触れ得ないが、この小冊誌にも主なものは記載。ただ調査はその後、笠岡市によって数次続いているので、皇朝銭は100点ばかり、三彩小壺は、底部だけが数個体増えており、本来は蓋付の状況だったとみられる。ただ大形の須恵器壺で、山際に接して据えられ、現場で完形近く復元された唯一の須恵器大壺中から1個の三彩小壺の身と、小石一個が発見され、この大壺中、蓋は発見されなかった。砂中で発見の三彩小壺や蓋の周辺には、平石が並べられ、須恵器瓶や平瓶など、和同銭などが多く発見されたが、特に遺構としては確認出来ぬ状況であった。遣唐使などによる海での祭祀かとされた。これら多くの遺物は、2003年5月に224点一括で国指定。三彩は皆奈良三彩小壺の身と蓋別々に数えてで25点。

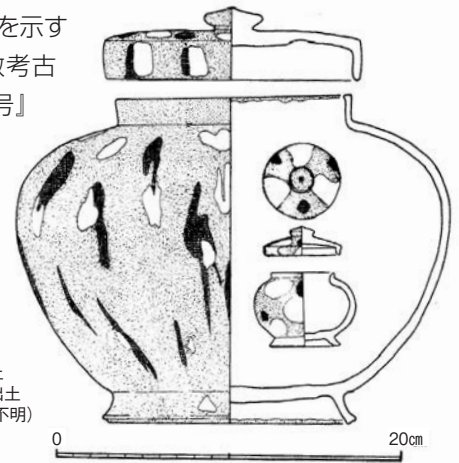
本題に帰ろう。倉敷考古館にもたらされた三彩の大壺は、理事長や大原美術館の理解・援助、紹介者や所蔵者のご厚意で、速やかに考古館の展示品となったのである。そうしてこの奈良三彩薬壺形壺は、再発見後直ちともいえる1989年には国指定の重要文化財となった。

今回話題とする、三彩大壺と

小壺の大きさの差を示すため、忠彦が『倉敷考古館研究集報 20号』に載せた図を略示しておこう。

□ 白色釉  
■ 緑色釉  
■ 褐色釉

▲(大) 伝岡山県津山市出土  
(小) 同 笠岡市大飛鳥出土  
(身と蓋のセット関係不明)  
【図: 忠彦】



## 間壁忠彦 略歴

1932~2017年 岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる  
1951年 岡山県立操山高等学校卒業  
1955年 岡山大学法文学部法学科卒業  
1954~1973年 (財)倉敷考古館学芸員  
1973~2006年 同上館長  
1968~1998年 広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講  
1982~2005年 就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講  
2006~2015年 (財)倉敷考古館学術顧問

## 間壁葎子 略歴

1932年 岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる  
1951年 岡山県立操山高等学校卒業  
1955年 岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業  
1955年 岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)  
1956~2015年 (財)倉敷考古館学芸員  
1979~1986年 中国短期大学非常勤講師(歴史学)  
1985~2004年 神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授  
1995年 明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回回は山本暉久先生です。



## リレーエッセイ

### マイ・フェイバレット・サイト 215

#### 上野遺跡 ～長野県松本市

古林 舞香

私が紹介する上野遺跡は、長野県松本市波田地区に所在する遺跡で松本平の西南部に位置しています。国宝松本城を中心とする市街地から僅かに離れ、西に眼前に聳え立つ北アルプス、東に遠く美ヶ原を臨む長閑な農村地帯に上野遺跡は存在します。

この土地一帯は、北アルプス槍ヶ岳から松本平へ流れ込む梓川が形成した河岸段丘と、同山脈の前山を水源とする唐沢川が形成した扇状地から成り立っています。この広大な平野部に、縄文時代前期から晩期を通じて幾つもの集落が営まれてきました。

梓川の河岸段丘上に位置する葦原遺跡では、昭和39(1964)～昭和54(1979)年に松商学園高等学校によって12回にわたる学術調査が行われ、縄文中期から後期を中心とした大規模な集落跡を確認しています。なかでも、複数の柄鏡形敷石住居跡及び柄鏡形竪穴住居跡といった特殊な建物跡の検出や、釣手土器、土偶、石棒など祭祀遺物も豊富に出土し、長野県を代表する縄文遺跡として県外にも広く知られています。

梓川から南へいくと、唐沢川扇状地の下流に複数の縄文集落が密集して存在していますが、特に、前期から晩期の集落跡である麻神遺跡は東京国立博物館所蔵の土面の出土地としても有名です。近年では平成30(2018)年度に土地改良事業に伴う緊急発掘調査が市教委によって実施されており、竪穴建物跡を主体とする集落遺構が密に検出され、竪穴建物内からは大形の石囲い炉や埋甕が発見されました。遺物は、中期後葉を主とする縄文土器や多数の石器が出土しています。

これらのように、松本平の南西山麓部に営まれた縄文中期集落の規模や密度は、長野県茅野市、富士見町などハヶ岳山麓にみられる縄文集落と比較しても遜色がないほどです。

上野遺跡は、松本平南西山麓部に営まれた縄文集落の一角をなす遺跡で、葦原遺跡の東方に位置します。梓川右岸の東西に伸びる河岸段丘上には、西側から波田下島遺跡、葦原遺跡、上野遺跡と3つの縄文遺跡が存在し、それらは葦原遺跡を拠点とした共通の遺跡群として捉えられています。上野遺跡ではこれまで発掘調査が行われたことがなくその実態は不明でしたが、畑地から縄文土器や打製石斧などの石器が多く採集されていたことから、遺跡の存在自体は予てより知られていました。



▲埋設土器の出土状況

初となる調査は、令和元(2019)年に実施された鉄塔移設工事に伴う緊急発掘調査で、東西に長い遺跡の西端において調査区を2か所設け、合計250㎡ほどの面積を調査しました。遺構は、70基近い土坑・ピットを中心に、竪穴建物跡、溝状遺構などを検出し、遺物はなかなか乏しいものの、コンテナ一箱分の縄文土器・石器などが出土しました。縄文土器は中期中葉の区画文を有する深鉢が主で、なかには搬入品とみられる焼町土器も見られます。中期中葉に次いで中期後葉から後期までの土器片も出土しましたが、遺構に伴うものはごく僅かでした。

確認した遺構の中で注目されるのは、土器埋設遺構ともとれる直径1.0m程度の円形土坑です。検出段階から土器片が顔を出していましたが、掘削を進めると土坑の中央付近で、藤内式の深鉢が正位から若干傾いた状態で出土しました。この埋設土器のほかには土坑内からの出土遺物はなく、この遺構がどういう意図を持って掘られたのか容易に判断はできませんが、今回の調査から上野遺跡の性格を考えるうえでは重要な遺構といえます。また、縄文時代以外としては、中世の土器片を包含する浅い溝状遺構や、時期不明ピットの中には掘立柱状に並ぶものもみられました。これについては、近隣の葦原遺跡や真光寺遺跡から掘立柱建物跡や火葬墓など中世の遺構が確認されているため、上野遺跡においてもこれらの生活空間が及んでいたとみて良いのではないかと考えますが、あくまで憶測に過ぎません。

これらのように、上野遺跡の初となる1次調査では、縄文時代中期を主とした遺構・遺物を確認し、周辺遺跡と同様に縄文集落が広がっていたことが明らかとなりました。ただ、検出した遺構の種類や密度からみると調査地は集落の居住域からは外れており、この集落の中心部が遺跡内にあるのか、あるいは西隣の葦原遺跡にあるのか、今後の発掘調査成果に期待が膨らむばかりです。

この遺跡は、私が初めて主な調査担当として調査を行った遺跡です。経験があまりないなかでできるだけ慎重に調査を行っていたつもりでしたが、当時は振り返ることで「もっといいやり方があったのでは」「あの時こうしていれば」といった反省や後悔が波のように押し寄せてきました。緊急調査を行う以上、どんな現場であれ予算や時間、作業環境などの制約が必ず付いてきます。そのなかで少しでも多く遺跡の情報を記録できるよう精進せねばならないと改めて強く感じました。

現在は別の自治体で埋蔵文化財に携わっているため、上野遺跡を再び掘る機会はまだ巡ってこないかも知れませんが、この調査を経て学んだことは確実に私の糧となっています。この経験を活かし、これから出会う遺跡にも真摯に向き合って調査をしていきたいと思えます。

#### 参考文献:

- 波田町教育委員会 1995 『葦原遺跡Ⅱ 緊急発掘調査報告書』
- 松本市教育委員会 2020 『麻神遺跡発掘調査報告書』松本市文化財調査報告No.238
- 松本市教育委員会 2021 『上野遺跡発掘調査報告書』松本市文化財調査報告No.242

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは伊沢加奈子さんです。

## 考 古学者の書棚

## 「古道 古代日本人がたどったかもしかみちをさぐる」

藤森栄一 著／講談社学術文庫(1999)

芹沢 一路

## はじめに

私が今回取り上げるのは藤森栄一著「古道」である。大学で文化財学科を専攻して卒業したが、その後は考古学とは縁のない企業を転々とした。卒業から15年以上を経た昨年、ご縁をいただいて39歳の新人学芸員として現在の職場に勤務している。そんな私が、何度も繰り返し繰り返し読んだのがこの「古道」である。

## 「古道」との出会い

私が大学に入学したのは今から約20年前の事である。入学して先輩たちが最初に読みなさいと言ったのが、藤森栄一の「かもしかみち」であった。

余談ではあるが考古学の世界では、先輩が後輩に「かもしかみち」を読むように教えるのは、ひとつの通過儀礼の様なものだと後に知った。そうしたわけで、私は「かもしかみち」を本屋で購入して読んでみた。読み進めていくうちに心の中は、梅雨の曇り空の様になっていった。たぶん「あの頃の考古学」や「春愁の暦」など死の悲壮感漂う内容に、未熟な私は気持ちがいまい付かなかっただろう。もやもやとした気持ちの中で、次に読んだのが「古道」であった。リズムよいテンポで書かれており、読後感がとても良いものだった。

## 「古道」をひも解く

本書は、「かもしかみち」、「峠と路」と合わせて著者の“道”シリーズのひとつとして数える事ができる作品である。おそらく著者にとって“道”とは特別な言葉であると推察できる。本作の序の中で「人間の道は長かった。いろんなことがあった—私にも、そして、あなたにも、私の古道にそれが通じて流れているとすれば、それぞれ、この本に書かれた切なる願いなのである。」と書かれている。

おそらく著者にとっての“道”とは、過去から現在、そして未来へと続く時間の中で生きて人々の営みから紡ぎだされたものであろうと推察する。

本作では、旧石器時代から現代(1960年代)までの十九章の多岐にわたる“道”の物語が編まれている。

それらは必ずしも全てが学問的考察だけではない。たとえば第三章の「ルング・ワンダリング」の中では、霧ヶ峰の七島八島で出逢った少女への恋心や、南アルプスの鋸山で遭遇した死体など、著者が青春時代に登った冬山の思い出を感情豊かに描いている。

また、第四章「草原の放浪者」に登場する沖縄戦で戦死した若き考古学者江藤千真樹、第五章「人喰い沼」では縄文時代の丸木舟を発見した角田本治、慶一親子、第十八章「鎌倉へ鎌倉へ」においては霧ヶ峰で旧御射山の棧敷遺構に魅せられた上田貢など、考古学に魅せられた人々も多く登場する。

彼らは道半ばでその生涯を終えたり、学問的に長い間認められないなどした人物達である。著者は太平洋戦争の南方戦線を生き延び、故郷に帰還するも満身創痍の状態であった。また、中央の学界とは学問的にも心理的にも大きな隔たりを感じていた。こうした人々に対し、著者は心の中で共感し、またその姿を自分に重ね合わせていたのではないだろうか。

また、本書では印象深いワードも盛り込まれている。第八章「ヒスイと黒耀石の道」に出てくる“黒耀石狂時代”がそうだ。黒耀石狂と書いてオブシディアン・ラッシュと読ませている。著者の死後、黒耀石の流通や採掘の様子についての調査研究が大きく進んだ中でも、オブシディアン・ラッシュという言葉は実在的を射るものだと思う。他にも、第六章「雑木林への道」、第十七章「山を拓く錫杖」などが印象深い内容だった。

## 「古道」と重なるファミリーヒストリー

「古道」に書かれている内容の中には私のファミリーヒストリーと重なる部分がある。私の母方の実家は、著者が暮らした諏訪市とは霧ヶ峰高原を隔てた反対側の長和町にある。ちなみに「古道」の中には、和田峠、星糞峠、大門峠、仏岩の宝篋印塔等の長和町ゆかりの場所や文化財が登場する。

私の曾祖父は柳沢市次郎という。貧窮の中で育ち、スペイン風邪で家族の多くを失うなど苦労をした人である。その曾祖父が大正末から昭和前半に生業としていたのが炭焼きである。第十五章「峠の神様」で著者は昭和4年に雨境峠を訪れている。その中で、蓼科山にある樽ヶ沢の炭焼き小屋と周りの風景について書かれている。

そこは、昭和初期に曾祖父が炭焼きを行っていた場所であった。曾祖父と一緒に樽ヶ沢の炭焼き小屋で暮らしていた現在90歳を越える大叔母に、「古道」のその一節を読んで聞かせると懐かしがってくれた。残念ながらその中で登場するちよんまげの老翁の事は記憶に無いとの事だった。おそらく、曾祖父はこの老翁の後に、樽ヶ沢で炭焼きを始めたのであろう。

また、第十九章「久遠の旅行者」の中で、佐久の鯉が生きたまま水をはった盤台に入れられ、蓼科の湯治場に運ばれた事を尾崎喜八の文章から取り上げている。著者は、実際には鯉が運ばれている姿を見ていないようであるが、先述した大叔母は幼少の頃に樽ヶ沢でその姿を見たらしい。佐久から運ばれてきた鯉の中には途中で弱ってしまう物もあった。それを曾祖父は安く買い、沢の水を溜めた場所に放しておき、1匹づつ引き上げては調理して食べたとの事だった。ごくごく平凡な我が家の歩みと重なる内容が書かれているこの本は、そういった意味でも貴重で大切な本である。

## おわりに

著者である藤森栄一が「古道」を学生社から出版したのが1966年で55歳の時である。脳出血や腰骨損傷などの健康不安と戦っていた著者は、50代に入ると縄文農耕論や井戸尻編年など藤森栄一の代名詞となる論文を精力的に発表をしている。本書はそうした中で誕生した。しかし、本書を刊行してわずか7年後に、著者は62歳でその生涯を終える。

来年で藤森栄一没後50年を迎える。著者が辿った“道”はまだまだ続くのである。後進である我々があゆみを止めない限りその“道”は消えないであろう。

## アルカ通信 No.222

発行日 2022年3月1日  
企画 角張淳一(故人)  
発行所 考古学研究所(株)アルカ  
〒384-0801  
長野県小諸市甲49-15  
TEL 0267-25-0299  
aruka@aruka.co.jp  
URL : http://www.aruka.co.jp